

子どもたちが小さいころ、横浜に住んでいて、東京に出かけた時は子どもたちと、青山にある落合さん主宰の「クレヨンハウス」で絵本をよく買っていました。子供の絵本の専門店でもありました。その落合さんが認知症のお母さんを介護された話はあまりにも有名です。お仕事の量を減らしつつ、自宅で介護するという生活を7年間続けられ、介護の問題にも取り組まれています。さらには、現在70歳になられ、「おとなの始末」という本をかかれ、終わりのくる自分の人生にどんな姿勢でむきあうか、リアリティをもった人生の締めくくり方、始末の付け方とは何か、自分の人生観、倫理観に対峙しながら、真摯に考えられています。残された日々を十分に存分に生き切る、「生あるうちは生き切るしかない」という覚悟で社会に対する活動にも奔走されています。私たちの人生と重ね合わせながら、少しでも今後の人生の過ごし方に役立てていただけたらと思います。